

映画監督
ミカエル・ハフストロームさん



1960年、スウェーデン生まれ。ストックホルム大学で映画を学び、ニューヨークのスクール・オブ・ビジュアル・アーツに入学。卒業後、フリーの映画評論家としてキャリアをスタート。スウェーデンのテレビで助監督や脚本の仕事をするようになり、テレビドラマの監督に。95年、映画監督としてデビュー。主な監督作に「ボゼッション」(04年)、「1408号室」(07年)、「ザ・ライト/エクソシストの真実」(11年)など。

忍耐を学んだ1作

「とにかく、今回の作品では忍耐、ネバーギブアップで作れるということを学びました」。

現在公開中の映画「シャンハイ」のPRのため来日したミカエル・ハフストローム監督は苦笑いを浮かべた。

同作は、1941年太平洋戦争開戦間近の中国・上海が舞台。物語は、米国海軍の諜報員が殺害された。その殺害の謎を追ってひとりの男が上海へ。親友の死の真相究明のため米国諜報部員ポールは、目撃者の日本人女性スミコを追うが姿を消してしまう。調査を進める中で事件の鍵を握る裏社会のアンソニーと妻アンナと知り合う。一方で、日本軍情報部の大佐タナカがポールの前に立ちはだかる。ノスタルジックサスペンス作品。

中国・上海でのロケを敢行する予定だったが許可が取れず、結局、屋内を英国で、屋外をタイで撮影することになった。

1941年当時の上海は英国建築家が建てた建物が多く、これと似た建築が現代の英国ロンドンでも存在し、撮影が可能だった。監督は「建物自体は意外に残っているんですよ、いまの上海よりも」と、悪戯っぽい笑顔を見せた。

タイでの屋外ロケは、3カ月を費やし巨大なオープンセットを完



左から渡辺謙(タナカ大佐役)、ジョン・キューザック(ポール役)、コン・リー(アンナ役)、チョウ・ユンファ(アンソニー役)
©2009 TWC Asian Film Fund, LLC. All rights reserved.

成させ、世界に2台しかない1930年代の日本製戦車が提供されるなど、タイ側の協力もあった。

また同作は、舞台となる時代と同様、さまざまな国籍の俳優、スタッフが集まっている。日本からは、タナカ役の渡辺謙さん、スミコ役の菊池凛子さん。主人公のポールにジョン・キューザックさん、上司役のリチャードにデヴィッド・モースさん、謎の死を遂げる親友コーナーのジェフリー・ディーン・モーガンさんは米国。ポールの親友でもあるレニ役のフランカ・ポテンテさんはドイツ。

上海裏社会のボス、アンソニーのチョウ・ユンファさんは香港、妻アンナ役のコン・リーさんは中国。監督はスウェーデン、脚本はイラン、撮影はフランス、プロダクションデザイナーが英国という多国籍。

「大変でした。ロケ地の変更で皆さんを待たせてしまった。そういった点で苦労が多かった作品でもありました。それでも皆さんに助けられました」と感謝の言葉を連ねた。

監督を引き受けたことについては「国際的な作品に惹かれた。文化も違い、それぞれの歴史と文化を見ることができると。

また「当時の上海のリサーチを徹底的に行った。物語はキャラクターありきだが、歴史的背景は曲げないように、なるべく正確

に描いたつもりだ」と落ち着いた口調で自信を見せた。

さらに歴史的なわだかまりを持つ日本と中国の歴史についても「そのことについては渡辺と意見交換し、(私との)相違はなかった。それ以上に、当時の日本軍人についていろいろと話してもらった」と撮影でタナカを演じた渡辺さんとのエピソードを幾つか明かした。

「現場での彼は、ジェントルマンで、ふざけていても、撮影に入ると突然変わる。凄い集中力を持っている人」とオンオフの切り替えの見事さに驚いていた。そして、常に「紳士だった」とも。さらに監督や製作側との意見交換を求めるなど、積極的な姿勢に監督は「私は、ウェルカムでしたけど」と笑顔を見せた。

今回、アジア人の俳優陣と共に仕事をし、その取り組み方に強い刺激を受けたようだった。最後に「いま、ハリウッドはアジアが舞台の映画作りは困難になっている、ターゲットも10代に傾倒しているので作るのが難しい、その中でこういった作品が作れたことは貴重でした」と感慨深い表情を見せ満足そうな笑みを浮かべていたのが印象的だった。

ペンとカメラ・佐野富成